The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	「よしさらば」小論
Author(s)	山口, 堯二
Citation	語文. 1981, 38, p. 74-81
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/68680
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

「よしさらば」小論

山口堯二

一　はじめに

「詞不可出三代集」（定家『詠歌大概』）という規範意識に照らしても、三代集の用語の、三代集にはない新たな組み合わせは、すでに「心を本として詞を取捨」（『毎月抄』）する類の問題だったのであろう。「よしさらば」ということばは、そういうものとして、新古今集時代、あるいは、もう少し前から、歌をよむ人々の多くが共通に何か新鮮な魅力あることばと感じるようになっていたもののようである。(1)

たとえば、顕昭が

(1)よしさらばなみだにくちねからころもほすも人めをしのぶかぎりぞ（千載・恋三・八一六・歌合し侍ける時よめる・顕昭法師・笠間書院刊本）

と詠む時、「よしさらば」は、もはや忍ぶる恋をどうにも自制できなくなったというていで、それまで堰きとめていた感情の高まりを一気に切って落とすようなこの歌い出しに、掛け替えのない一句という印象を与える。

二　「よしさらば」の源流

しかし、こういう「よしさらば」は、もともとありふれた日常の口頭語であったといってよい。たとえば、次のような用例にそれをうかがうことができる。

(2)大将、「よし、さらば」とて、かへり給(ひ)ぬ。（宇津保・くらびらきの下）

(3)男「たゞかたとき、とゞめたまへ」とせめければ、「よし、さらば、耳とがばかりに聞かむ」とて（平中・二十五）

(4)「……」などきこゆるほどに、例の、あけはてぬ、「よし、さらば、このむかし物がたりは尽きすべくなんあらぬ。また人きかぬ心やすき所にてきこえん。……」などのたまふ。（源氏・はし姫）

物語の会話文におけるこういう「よしさらば」には、「よし」と「さらば」の間にあきらかに句切れがある。「よし」は多少とも決断的な気持を表し、「さらば」は相手の言動や周囲の状況をうけてそれを前提に主体の志向の表現を導くことが多い（例(3)(4)）。その場合、「よし」は結果的にその志向を予告するような役割も担ってい

る。

和歌に用いられた「よしさらば」も、比較的はやい時期の例には、おしなべてこれと同じ趣の対話的な用法がめだつ。たとえば次の例がそれである。

(5)よしさらばまたれぬ身をば置ながら月みぬ君が名こそおしけれ
（後拾遺・雑一・八六六・こよひかならずとたのめたる女のもとに、月のあかゝりける夜、まかりて侍(り)けるに、おろしこめて女あひ侍らざりければ、かへりて又の日、つかはしける・藤原隆方朝臣・総索引本）

(6)よしさらばつらさはわれにならひけりたのめてこぬはたれかをしへし（詞花・雑上・三一五・たのめたるよ、みえざりけるおとこのゝちにまうできたりけるに、いであはざりければ、いひわびて「つらきことをしらせつる」などいはせたりせれば、よめる・清少納言・総索引本）

これらの「よしさらば」歌（「よしさらば」を用いた和歌をこう呼ぶことにする）における「よし」には、相手の言動などの前に、「まあ、それなら」と不本意ながら譲歩しようという気持が認められる。その場合、相手の言動などをうけているのが、「よしさらば」の「さらば」であることは、その詞書からも明らかであろう。したがって、その「さらば」という仮定条件句は、仮定表現の類型からいえば、現実仮定の表現と見てよい。[2]「さらば」という形の条件句は一般的にもその傾向の著しいものである。

『俊頼髄脳』には能因が経信に語った話として、志賀の老法師が京極御息所の御手を賜わり、「初春の初子のけふの玉帚手にとるからにゆらく玉の緒」[3]とよみかけた際の御息所の返歌として、次の歌を引く。

(7)よしさらばまことの道にしるべしてわれをいざなへゆらく玉の緒

これもやはり贈答歌として贈歌の内容をうけている点、中古の物語類の会話文の「よしさらば」につながる対話的用法の例といってよい。

西行の次の歌なども、その点同様と見てよいものである。

このしうをみてかへしけるに　院の少納言のつぼね
まきごとにたまのこゑせしたまづさのたぐひは又も有けるものを
かへし

(8)よしさらばひかりなくともたまといひてことばのちりは君みがゝなん（山家集・私家集大成本）

三　妥協的傾向

独詠歌や題詠の歌としての「よしさらば」歌も、院政期に姿をあらわす。俊頼の次の詠はその早い一例である。

(9)よしさらばをふるひつぢのかしけつゝ物にもならでしもがれねとや（散木奇歌集・四・ひつぢ田をよめる・私家集大成本）

ここで「さらば」がうけとめているのは、「ひつぢ田」の状況である。その「さらば」は、以下の第二～五句とも相関しているが、同時に、むしろそれ以前に、「よし」と相関することによって、一度切れていると見てよい。そう見なければ「よし」が浮き上がってしまうことになるからである。その意味でこの「さらば」は二重の役割を兼ねていると見なければならない。

「よしさらば」が贈答歌における相手の言動などをふまえたもの

から、このように独白的作品における一種の自問自答的な内面の対話を示すものへと発展していくことは、この語句の歌語への傾斜をいっそう高めることになったと考えてよいだろう。「さらば」が自問自答の「さらば」となることは、その条件句のうけ持つ内容がそれだけ主観化することにおいて「よし」とのいわば同質化を招き、「よし」と「さらば」の熟合化を促しもしたであろう。それもその歌語意識を高める条件になったと思われる。

次に掲げる俊恵の作も独白的な使用例であるが、「よしさらば」で句切れとなる傾向のいっそう明らかな例だけに、その熟合化を推定するよい手がかりになる。

(10)よしさらば君も今夜我ゆへの涙もよほす山のはの月（林葉和歌集・五・月前恋　右大臣家歌合に・私家集大成本）

右の場合、第二句以下は、初句の「よしさらば」にとってその情意を説明するもの、あるいは、その理由になっている。この「よしさらば」は、後続する歌句をその説明理由として帰結的に本来の願いを断念し、与えられた現実に妥協しようとする情意を担っていること明らかである。

「よしさらば」がこのように一首の中で意味上の帰結となる詠み方、あるいは、少なくともそこからの発展が見られない詠み方で、同様に現実への妥協的な情意を担っている例に、次のようなものがある。

(11)よしさらばしぬてはこひじあふ事を一夜てふ名はたれかくるしき（源三位頼政集・下・一会之後不会恋といふ事を、歌林苑会に・私家集大成本）

(12)よしさらば涙にうとき身なりせば袖には月のやどらざらまし（拾玉集・私家集大成本）

ところで、これらの「よしさらば」歌のように、断念と妥協の情意を表すには、より古くから「さもあらばあれ」という言い方があって、和歌にも用いられていた。「さもあらばあれ」も、たとえば次のようにやはり帰結的に用いられる傾向があった。

(13)思ふには忍ぶることぞ負けにける逢ふにしかへばさもあらばあれ（伊勢・六十五）

(14)ひたぶるに死なば何かはさもあらばあれ生きてかひなき物思ふ身は（拾遺・恋五・九三四・よみ人しらず）

(15)さもあらばあれ雲井ながらも山のはに出ぬる夜半の月とだにみば（和泉式部集・日本古典文学大系本）

(16)さもあらばあれやまと心しかしこくはほそちにつけてあらす計ぞ（後拾遺・雑六・誹諧・一二二〇・かへし・赤染衛門・総索引本）

(13)(15)は、仮定条件と相関するその帰結である。(14)も、「ひたぶるに死なば」との意味的相関、あるいは、「生きてかひなき物思ふ身は」が仮定条件相当とも見うる、それとの意味的相関において帰結的である。(16)も、第三句の仮定条件との意味的相関、あるいは、その帰結たる第四・五句と等価であることにおいて、やはり帰結性が認められる。

富士谷成章は、「よし」を「心にかなはぬ事のさりとてせんかたもなければ、よきにしてうちすてたる詞」（『かざし抄』）と説明するが、はやく顕昭はこの「よし」に基づく万葉語「よしゑやし」の意を「あらばあれと云心」（『袖中抄』第二）と、同語反復的な仮定表現に置換して説いた。その「あらばあれ」は、「さもあらば

あれ」から現実を指示する「さも」を取り除いた形である。「さもあらばあれ」の「さも」は、「あらば」と呼応するかたちで「よしさらば」の「さらば」に近い役割を担っている。そう考えれば、「よしゑやし」を「あらばあれ」と言い換えた頭昭は、「よしさらば」と「さもあらばあれ」とが表現上ほぼ等価であるという見方をしていたと考えてもおかしくはない。

「さもあらばあれ」には、現実への妥協的情意を担う一方において、その断念―妥協をむしろ梃として、次のようにせめてこれだけはと一つの願いを実現させようとするものがある。いわば妥協を手段とする表現である。

むば玉の夜半のけしきはさもあらばあれ人の心を春日とも哉
（後拾遺・恋二・六八四・返し・童木・総索引本）

同様に、「よしさらば」歌にも、次のようにその断念―妥協を手段的に活かす方向の表現が早くから見られる。

ある人、けさうする女の、松ふくかぜのと、ひとしていはせたるを、とてこふに、ふたつが中にこゝろにつかむをとて

しられじとおもひはなたばをとにだにきけとも人のいはずぞあらまし

(17)よしさらば松ふくかぜのをとをだにひとづてならできくよしもがな（道命阿闍利集・私家集大成本）

(18)よしさらば心はつくせ秋の月入なん後の物はおもはじ（玉吟集〔解題〕・私家集大成本）

(19)よしさらば忘るとならばひたぶるに逢見きとだに思出づなよ（続後撰・恋五・九九二・百首の歌よみ侍りけるに・殷富門院大輔・国歌大観本）

四　自棄的傾向

しかしながら、せめてもの願いも、次のような内容のものになると、前向きの願いとはいいがたく、むしろ自棄的な方向への傾斜を認めざるをえないであろう。[4]

(20)よしさらば後のよとだに憑めをけつらさにたへぬ身ともこそなれ（新古今・恋三・一二三二・女につかはしける・皇太后宮大夫俊成・日本古典文学大系本）

自棄的な情意の表現も、より早く同語反復的な仮定表現によることが少なくなかった。しかし、前述の「さもあらばあれ」は、どちらかといえば妥協的に用いられる傾向があり、自棄的表現にはより具体的な意義の動詞が同語反復的に用いられることが多かったといえる。たとえば、俊成が『古来風躰抄』において「このおほんうたのすがた、このみこ、いかでかくはよみたまひけるにか」と評した惟喬親王の次の詠なども、自棄的表現を切実な願いを訴える手段とする傾向のきわめて著しいものである。

(21)桜花ちらばちらなむちらずとてふるさと人のきても見なくに（古今・春下・七四・僧正へんぜうによみておくりける・これたかのみこ・日本古典文学大系本）

次の式子内親王の歌が、この惟喬親王の歌と表現構造の上でよく似ていることについてはすでに述べたこともある。[5]

(22)玉の緒よ絶えなばたえねながらへば忍ぶる事のよわりもぞする（新古今・恋一・一〇三四・百首歌の中に忍ブル恋・式子内親王・日本古典文学大系本）

この詠には、⑳の俊成の歌とも情意的に、また、前後の文の意味関係という点で、ちょっとひびきあうものがありはしないであろうか。

同語反復的仮定表現と「よしさらば」歌との、自棄的表現における等価関係を指摘するには、さらにわかりやすい恰好の例もある。次の家隆の「よしさらば」歌は、㉑の惟喬親王の作と表現構造においても情意傾向においても、むしろ瓜二つといってよい。その相似の度は、㉒の同語反復的仮定表現による例以上である。

㉓よしさらばなきなもたてよたゝずとてさてもありへんこのよならねば（玉吟集・五・私家集大成本）

こういう例を見ると、「よしさらば」は、古くからの同語反復的仮定表現に替わりうる形式として、和歌における自棄的表現の資材としての性格を次第に強めていったのであろうと思われてくる。

「ちらばちらなむ」「絶えなばたえね」式の同語反復的仮定表現は、具体的な動詞の意義に依存する点で制約がある上、多くは七音の句になって一首中に占める位置も限られがちであった。それにくらべて、「よしさらば」は、あらゆる事態に対応できる融通性に富み、五音ということもあって一首中に占めうる位置にも目新しさがあっただろう。

同語反復的仮定表現にも五音の句になる例がないわけではない。それに、前述の「さもあらばあれ」は七音ながら、字余りの条件になるア母音を二個所に含むことで、五音の句としても用いられた。しかし、「さもあらばあれ」には前述のようにむしろ妥協的な情意の表現に用いられる傾向があった。したがって、第一句に用いられた次のような例には、むしろ「よしさらば」歌の歌い出しの技巧を同語反復的仮定表現によって逆に試みたという感なしとしない。

㉔ちらばちれよしや吉野の山桜吹き迷ふ風はいふかひもなし（千五百番歌合・二百十一番・左勝・女房〈御鳥羽院〉・続国歌大観本）

右の歌には、同語反復的仮定表現とともに、「よしさらば」の「よし」が「よしや」の形で併用されているが、第二句「よしや吉野の」は、「流(れ)てはいもせのやまのなかにおつる吉野の河のよしや世中」（古今・八二八）をふまえたものであろうから、併用するだけの意味は認められる。

次の歌も「よし」と同語反復的仮定表現の併用された例であるが、「よしならばなれ」が七音の句に収まり、重複の感はあるまい。

㉕うきうへのなほうきはてをきかぬ先にこの世のほかによしならばなれ（建礼門院右京大夫集・あまりさはぎし心ちのなごりにや、しばし身もぬるみて、心ちもわびしければ、さらばなくなりなばやとおぼゆ・日本古典文学大系本）

ちなみに、右の歌の詞書の「さらばなくなりなばや」の「さらば」は、散文の例ながら、明らかに「よしさらば」の意で用いられている。

右は同語反復的仮定表現と「よし」との併用例であったが、両形式の情意的な共通性から、「よしさらば」歌にも同語反復的仮定表現の併用された例が次のように見られる。

㉖よしさらばくもらばくもれ秋の月さやけきかげはいるもをしきに（大宰大弐重家集・私家集大成本）

㉗よしさらば袖の涙はもらばもれ誰故とだに人の知らずは（新後撰・恋一・八三七・紀淑文・国歌大観本）

このように「よしさらば」と同語反復的仮定表現が併用されると、後者のほうが具体的であるだけに「よしさらば」のほうがやや軽く使われているという感じになる。いずれにせよ、字数の限られた和歌でこれだけ相似たことばを併用する必要はあるまいという感を否みがたいものになっている。

さて、「よしさらば」は、このようにして同語反復的仮定表現を主要な形式にして開拓されていた自棄的な詠風にとって、新しい心をひらきうる可能性をひめた魅力ある形式と目されるようになったと見てよい。千載集では、「よしさらば」歌四首のうち、三首が妥協的情意を感じさせるものであるが、新古今集の「よしさらば」歌は、前掲(20)の俊成の詠のみであり、自棄的情意を感じさせるものであった。新勅撰集には、「よしさらば」歌が三首採られたが、そのうち二例が次に示すように自棄的表現の例である。十分なことは言えないが、およその傾向の推移を知る手がかりにはなりそうに思う。

(28)よしさらばなかでもやみね時鳥きかずは人もわする計に（新勅撰・夏・一四七・時鳥の歌十首よみ侍りけるに・法性寺入道前関白太政大臣〈忠通〉・国歌大観本）

(29)よしさらば茂りもはてねあだ人のまれなる跡の庭の蓬生（新勅撰・恋四・九二二・恋の歌あまたよみ侍りけるに・法印幸清・国歌大観本）

五　諦観的傾向

ところで、以上の例に見るような妥協的情意や自棄的情意の表現は、すでに古代文学以来、和歌には詠み古されてきたものであるといってもよい。ほぼ院政期頃からはじまる「よしさらば」の愛用傾向は、ただそういう古代和歌の風体に従う詠法に終始したのであろうか。そう思ってあらためて中世の「よしさらば」歌をながめて見ると、そこにはやはり新しい情意ないしは情念のあり方が認められるようである。

たとえば、西行の次の詠など、その意味でまず注意してよいものである。

(30)よしさらば涙の池に袖なして心のまゝに月をやどさん（西行上人集・述懐の心を・私家集大成本）

第三句の「袖なして」には、諸本により、「そでなれて」（私家集大成本『山家集』）「そでふれて」（日本古典文学大系本）「身をなして」（続国歌大観本）などの異同が見られるが、いずれにせよ、第三句あたりまでの歌句は、これまでに見た自棄的詠風のものと共通するように見える。しかし、第四・五句「心のまゝに月をやどさん」には、単なる自棄でもない、もっと積極的な選択なり意志なりが感じとれるからである。たとえば次のように、月への憧憬をしきりに詠んだ西行の詠としてはなおさらである。

ともすれば月すむ空にあくがるゝ心のはてをしるよしもがな（山家集・中・恋）

ながむるになぐさむことはなけれども月をともにてあかす比哉（山家集・中・恋）

このように現実への消極的な妥協や自棄的な悲嘆とは一味ちがう積極的な選択の意志を感じさせる例は、新古今集時代ともなると、前述の同語反復的仮定表現による歌にも出てくる。前掲(22)の式子内親王の「玉の緒よ絶えなばたえね……」には、自棄とも決断とも決

めかねるところがあることを以前述べたが、[6] 今改めて考えてみると、そこに認められるのは、右の西行の歌などにも共通する内面の積極的な選択の意志であり、さらにいえば、世の理を深く自覚するところから得られる諦観と共存するような透徹した意志であるように思う。

そして、そういう傾向は「よしさらば」歌において、より徹底していくように見える。たとえば次の例なども、その傾向の明らかなものであろう。

(31)よしさらば散るまでは見じ山桜花のさかりを面影にして（続古今・春下・一二五・弘長元年百首歌奉りけるに花を・前大納言為家・国歌大観本）

右の第四・五句「花のさかりを面影にして」には、次の俊成の作なども参考になっているかと思う。

面影に花の姿をさきだてゝいくへこえきぬ峯のしらくも（新勅撰・春上・五七・崇徳院近衛殿に渡らせ給ひて遠尋山花といふ題を講ぜられ侍りけるによみ侍りける・皇太后宮大夫俊成・国歌大観本）

「面影にして」見るという見方には、耽美に流れることを抑制することによって花のさかりの美しさをむしろ観想することを選ぶ積極的な意志が感じとられる。それは、かの兼好法師が

花はさかりに、月はくまなきをのみ見るものかは。（徒然・百三十七）

と主張した物の見方と何ら変わりのないものである。物の道理をあきらめ、無理な願いを捨て去ることによって真の美に対する理会が得られるといった、中世的な諦観に支えられた情意であり、美意識である。

もう一例取り上げよう。

(32)うきも契つらきも契よしさらば皆哀にや思ひなさまし（風雅・恋三・一一五四・題しらず・永福門院・国歌大観本）

憂きもつらきも、みな持って生まれた契りであるから、「あはれ」と思いなそうという。ここには、深い諦観の中で精神的に自立しようとする意志だけが認められるような気がする。自棄的情意や妥協的姿勢とはやはり無縁であろう。「よしさらば」は深い諦観を述べる発語のようなものになっている。同じ女院の次も歌も右のような情意を汲み取る上で参考になるようである。

物ごとにうれへにもるゝ色もなしすべてうき世を秋のゆふ暮（玉葉・雑一・一九四四・題しらず・永福門院）

風雅集の「よしさらば」歌は四首であるが、右の(32)の例をふくめて、そのうちの三首が「よしさらば」を第三句に据えている。それまでの勅撰集の「よしさらば」歌は、ほとんど第一句に「よしさらば」をおくものであった。[7] その意味で、風雅集の「よしさらば」は、その歌中に占める位置の上からも注意をひくものである。風雅集の第三句に据えた「よしさらば」歌三首は、もちろん撰者の好みによるであろうが、見方によっては、「よしさらば」を第一句に置いて一気に詠み出すような自棄的詠風の緊張感が時代の感覚に適合しなくなってきた顕れとも見られなくはない。風雅集以後の勅撰集は、再び「よしさらば」を第一句に据えた歌ばかりを、しかもそれ以前の集よりむしろ多く入集させているが、[8] それは和歌史に訪れた沈滞期のことである。「よしさらば」が担ってきた積極的な役割も、風雅集あたりで終わると見てよいのではないだろうか。

注

(1) 試みに、『私家集大成』により、「よしさらば」使用歌の四首以上認められる歌人を調べると、次のごとくである（数字はその歌数を示す）。

西行4、隆信4、慈円6、家隆6、定家6、雅経8、順徳院4、雅有4、頓阿10、正徹10。

(2) 拙稿「仮定表現の類型と諸相」（『国語学』83）。拙著『古代接続法の研究』（明治書院、昭55）第七章・二の二。

(3) 万葉集巻二十・四四九三番の大伴宿祢家持の歌。

(4) 折口信夫（『日本古代抒情詩集』全集第十三巻）は、この歌の「よしさらば」に、「自暴自棄を宣言する語。だが効果は柔軟だ。」と注している。

(5) 拙稿「同語反復的仮定表現の情意性――古代和歌におけるその分析――」（『国語国文』45ノ6、昭51・6）

(6) 注(5)に同じ。

(7) 風雅集以前では、次に示す一首が唯一の例外である。

我が涙吉野の河のよしさらばいもせの山のなかに流れよ（続古今・恋一・一〇三〇・題しらず・慈鎮大僧正）

(8) 新勅撰集以後の勅撰集における「よしさらば」歌の入集数は次のごとくである。新勅撰4、続後撰2、続古今3、続拾遺3、新後撰7、玉葉4、続千載6、続後拾遺3、風雅4、新千載4、新拾遺6、新後拾遺8、新続古今7。

（昭和五十五年九月二十日）